

## 『古今俳諧明治五百題』について

鈴木 円花\*, 綿 拔 豊 昭\*\*

## A study of “Kokonhaikai-meijigohyakudai”

Madoka SUZUKI, Toyoaki WATANUKI

## 抄録

『古今俳諧明治五百題』は、明治12年に俳諧宗匠である東旭斎によって編集された類題句集である。その撰には当時の旧派の有名宗匠であった、橘田春湖・三森幹雄が関わっているが、これまで研究者によって同書が詳しく取り上げられることはなかった。

そこで諸本調査を行った結果、次のことが明らかになった。

- ①いずれも明治12年の刊記があるが、本文の異同により第四刷までである。
- ②構成は太陽暦に則り、明治に新しく出来た、いわゆる「新題」も取り扱っている。
- ③人名録があり、刷によって新たな情報が付け加えられている。
- ④発行書林一覧が付されている。
- ⑤広告が付された刷がある。
- ⑥明治14年と明治17年に、それぞれ続編、続々編が刊行されている。

①と⑥の事実から、本書が需要の高い類題句集であり、その影響力が強かった可能性がある。また、②から⑤により、旧派の当時の状況の一端が知られる。

以上の点から、『古今俳諧明治五百題』は明治初期の俳諧の重要な資料である可能性が高いと言えるだろう。

## Abstract

“Kokonhaikai-meijigohyakudai” is the anthology of Haiku which was published in 1879 (Meiji 12). It was edited by Azuma Kyokusai, who was a master of Haiku in the Meiji era. Our research on this book at several libraries revealed the following:

1. This anthology went through four editions.
2. Its seasons follow the solar calendar. And it contains new themes of Haiku too, which composed in the Meiji period.
3. It holds a list which consists of a Haiku name, an address and a real name of Haiku poets. This list was revised as the book changed its edition.
4. It also has a list of the bookstores which sold this anthology.
5. Some editions attach an advertisement for other Haiku anthologies.
6. Two sequels were published afterward.

1 and 6 show a popularity of this book in those days. 2 - 5 can be information to know some situations of Haiku poets in the early Meiji era, though they are limited. Thus, this “Kokonhaikai-meijigohyakudai” can be one of the significant sources to understand Haiku culture in the early Meiji period.

\* 筑波大学大学院図書館情報メディア研究科博士前期課程  
Master's Program

Graduate School of Library, Information and Media Studies, University of Tsukuba

\*\* 筑波大学大学院図書館情報メディア研究科

Graduate School of Library, Information and Media Studies, University of Tsukuba

## 1. はじめに

明治維新より後の俳句を対象とした研究を概観してみると、その研究対象は、正岡子規に代表される、いわゆる「新派」とその弟子筋の俳句等が中心である。一方、「新派」に対する「旧派」に関しては、新派に比べるとその研究は微々たるものに過ぎない。江戸時代の俳諧を継承する旧派は、郷土史において意味を持ちえたとしても、文学史においては重要な位置を占めるものではなく、文学研究が行われなかったことは、当然のことといえるだろう。

しかし、正岡子規が俳句革新事業をはじめ明治 25 年（1892）以前の俳壇はすべて旧派であり、明治 25 年以後も、「旧派」から「新派」へと、即時かつ全面的に変わったわけではない。有名宗匠が存命中は、その俳壇は旧派のまま維持されていた。旧派の俳諧は表現としては、正岡子規が「卑俗陳腐」と述べたとおりかもしれないが（『俳諧大要』明治 28 年）、当時生まれた言葉を取り入れたものや、当時の文化を詠んだものがあるなどしており、当時の時代背景を反映していたといえる。明治の俳諧文化・庶民文化を理解する上で、「旧派」の俳諧は看過してはならないだろう。

明治期に下総で活躍した、俳諧宗匠東旭斎が明治 12 年（1879）に編んだ『古今俳諧明治五百題』は、当時の有名宗匠橘田春湖・三森幹雄がその撰に関わった類題句集である。同書は全国的に需要が高かったようで、「続編」、「続々編」も編まれ、全国的な本屋で取り扱われている。また、収録された句を詠じた俳人は特定の宗匠の門人に限られておらず、その巻末に付された人名録によって、その住居を知ることができる。明治期の類題句集については詳細な研究がなされておらず、これから一つ一つの資料を明らかにしていく必要がある。そのような現状において断定することは出来ないものの、後掲する『明治期の俳書・俳誌の研究』などに拠ると、同時代の類題句集に続編が編まれたり、こういった詳細な情報が載せられることはまれであり、『古今俳諧明治五百題』は、明治時代前半の俳諧・俳人の基礎資料といって過言ではないだろう。

しかしながら、『古今俳諧明治五百題』については、例えば勝峯晋風『明治俳諧史話』（昭和 9 年）<sup>(1)</sup>、村山古郷『明治俳壇史』（昭和 53 年、角川書店）といった、明治の俳諧に関する通史的な書にふれる程度に紹介されているほか、近年では越後敬子氏が「開化の部」に注目して諸論文で紹介されているものの<sup>(2)</sup>、それ以外は研究者に

よってこれまで特に注目されたことがなく、『俳文学大辞典』（平成 7 年、角川書店）をはじめとする俳諧の事典類にも立項されたことがない。そこで、本稿はこれまで部分的にしか取り上げられてこなかった『古今俳諧明治五百題』の全体像を把握するものである。

## 2. 編集者と撰者

はじめに、『古今俳諧明治五百題』が旧派の宗匠に編まれたものであることを確認するために、前掲『俳文学大辞典』によって、編集者及び撰者について述べておく。

編集者である東旭斎は、文政 5 年（1822）に下総香取郡多田の農家に生まれた。はじめは同じ下総香取郡出身で、文化文政期の江戸俳壇の重鎮であった寥松の門人である丁知に入門した。後に、天保期の江戸俳壇の一担い手であった由誓の門に入ったという。旭斎は地元を中心に朝日社と称する一門を率い、明治 30 年（1897）7 月 5 日、76 歳で死去した。別号には「声画庵」、「無耳坊」があり、『古今俳諧明治五百題』の序や凡例では、「声画庵」の名が用いられている。

撰者の橘田春湖と三森幹雄は、明治時代初期における旧派の俳諧において、ともに有力な宗匠であった。まず橘田春湖は、文化 12 年（1815）に甲斐国に生まれ、はじめは同じ甲斐国在住の嵐外の門に入ったものの、後に江戸に出て禾木（経歴不明）に入門。別号として「一笑」、「小築庵」などをもち、春湖と同じく江戸末期から明治初期にかけて活躍した等栽・為山とともに江戸三大家と称された。そして明治 19 年（1886）2 月 11 日、72 歳で死去。越後敬子氏の論文「明治前期俳壇の一樣相 ― 幹雄の動向を中心として ―」（連歌俳諧研究、第 87 号、平成 6 年）では、幕末から明治初期における俳諧師番付を紹介しているが、それによると春湖は文久 2 年（1862）の番付で小結に上がっており、幕末から既に有名な宗匠だったことが伺える。

同じく撰者の三森幹雄は、文政 12 年（1829）、陸奥国中谷に生まれた。別号には「不去庵」、「静波」、「天寿老人」などがある。明治政府によって俳諧教導職に任命され、明治 7 年（1874）、俳諧結社である明倫講社を設立し、門弟は 300 人に及んだという。明治 43 年（1910）10 月 17 日、82 歳で死去した。幹雄は同辞典内で「旧派俳諧の中心的存在」と称されており、明治期の俳諧宗匠の中では最も注目された人物といえよう。彼に関しては関根林吉氏の「三森幹雄評伝」に詳しい研究があり<sup>(3)</sup>、また、当時「新派」の中心であった正岡子規と比較して論

じられた研究もみられる<sup>(4)</sup>。

### 3. 書誌

『古今俳諧明治五百題』の書誌は諸本によって異なることはなく、四目袋綴、深緑色・布目表紙（縦15.2cm、横11.2cm）、上巻156丁（前付18丁、本文138丁）、下巻137丁（本文112丁、後付25丁）である。

表紙左肩に四周子持梓の刷題箋、「東旭斎編 古今俳諧明治五百題 乾（坤）」とある。「古今俳諧」は角書。

巻首題は「古今俳諧明治五百題 上（巻之下）」。「古今俳諧」は角書。

見返し題、目次題は「明治五百題」。

刊記は以下のとおり。

明治十二年七月卅一日板権免許／同年九月十五日出版

撰者 東京府平民／橋田春湖／深川区中佐賀町一丁目廿四番地

同 同／三森幹雄／日本橋区蛸壳町二丁目四番地

編集人 千葉県平民／東旭斎／下総国香取郡多田村七十三番地

出版人 東京府平民／江島喜兵衛／日本橋区本石町二丁目九番地

発売人 千葉県下総佐原町三百七十三番地／朝野利兵衛

前付は序、凡例、目次から成り、後付は跋、人名録、発行書林を記す。

### 4. 諸本

明治期にいかなる俳書が刊行されたかについては、そのほぼ全貌を、河合章男氏の博士論文、『明治期の俳書・俳誌の研究』（平成18年、筑波大学）によって知ることができる。河合氏は、主に図書館等の蔵書目録によりその俳書の所在を確認しており、それによると『古今俳諧明治五百題』は、以下の図書館で所蔵されている。

1. 国立国会図書館
2. 天理大学附属天理図書館
3. 俳句図書館鳴弦文庫
4. 弘前市立弘前図書館
5. 三康図書館
6. 成田山仏教図書館

上記機関の所蔵本を調査したところ、国立国会図書館（1）、天理図書館（2）、鳴弦文庫（3）、三康図書館（5）、成田山仏教図書館（6）は上下巻揃いで所蔵、弘前図書館（4）は下巻のみを所蔵していた。また、国立国会図書館、天理図書館のものはマイクロフィッシュ化もされていた。

これらの諸本を比較対照した結果、『古今俳諧明治五百題』は、いずれも先に記した明治12年の刊記が記されていないながら細部に改訂がなされており、次の「諸本の相違点」の項で述べるように、初刷から第四刷までであることが明らかとなった。国立国会図書館（1）の所蔵本が初刷、三康図書館（5）のものが第二刷、鳴弦文庫（3）、弘前図書館（4）、成田山仏教図書館（6）のものが第三刷、天理図書館（2）のものが第四刷であった。下表はこれらをまとめたものである。

	図書館	巻	刷	注
1	国立国会図書館	上下	初	マイクロフィッシュ
2	天理図書館	上下	四	マイクロフィッシュ
3	鳴弦文庫	上下	三	—
4	弘前図書館	下のみ	三	—
5	三康図書館	上下	二	—
6	成田山仏教図書館	上下	三	—

また、河合氏の同論文によると、今回調査したこれらの図書館以外に、以下においても『古今俳諧明治五百題』が所蔵されている。

7. 伊勢原市（個人蔵）
8. 小平市（個人蔵）
9. 世界文庫（不明）

しかし、伊勢原市（7）、小平市（8）のものはそれぞれの市内にあることは目録に示されているものの、個人蔵のため調査は行うことが出来なかった。また、世界文庫（9）は、世界文庫出版、大塚毅氏編著の『明治大正俳句史年表大事典』（昭和46年）に「古今俳諧明治五百題」の名が見られるため挙げられたものと考えられる。しかし、本書は所蔵目録ではなく俳句関連事項や資料を集めた事典であり、『古今俳諧明治五百題』に関しても紹介しているのみで、執筆にあたっていずれの資料を用いたかは不明である。そのため今回の調査には含まれてい

ない。

## 5. 諸本の相違点

初刷から第四刷までの相違点は、おもに後付として付されている「古今俳諧明治五百題人名録」に見られた。人名録とは、『古今俳諧明治五百題』に俳句を載せている作者に関して、俳号、住居、氏名（もしくは結社名など）を挙げ、俳号のいろは順に表に並べたものである。

「古今俳諧明治五百題人名録」における各刷の相違点をすべて挙げることは紙数の都合上難しいため、ここではその訂正箇所数を挙げ、どのような変更であったのかを例示することとする。

まず初刷から第二刷においては、変更が3ヶ所みられた。初刷では空欄だったところに、第二刷において新しい項目が追加されていたところ(a)が1ヶ所。初刷では字が彫られていなかったところに字が彫られ、情報が付加されたところ(b)が1ヶ所。初刷にはあった項目を、第二刷では削除したところ(f)が1ヶ所、である。(f)に関しては人名録中に見られるのはこの一例だけで、これは初刷においてこれと同じ項目があり、重複していたため削除されたものである。これらの変更例は、第四刷までの増補改訂の説明後にまとめて列記する。

次に、第二刷から第三刷においては、人名録全体で変更が45ヶ所あった。まず、初刷から第二刷においての改訂と同じような、(a)に該当する変更が3ヶ所、(b)に該当する変更が9ヶ所見られた。また、先の改訂では見られなかった種類の変更として、まず第二刷での表記に第三刷で情報を付加したところ(c)が2ヶ所みられた。また、第二刷での情報を訂正して、第三刷で表記し直しているところ(d)が29ヶ所。第二刷にもあった項目を、第三刷で違う場所に移動させたもの(e)が2ヶ所、それぞれみられた。上記した初刷から第二刷への改訂は、そのまま継続している。

第三刷から第四刷においては、第三刷までにみられたと同種の変更が、全体で6ヶ所見られた。具体的には、(b)の変更が2ヶ所、(d)の変更が2ヶ所、(e)の変更が2ヶ所であった。上記した第二刷から第三刷への改訂は、そのまま継続している。

以下、それぞれの変更((a) - (f))を例示する。

- (a) 前の刷では空欄だったところに、新しく項目を追加したもの

例) 空欄 → 「よし女 信州川田 青柳里俣妻」

- (b) 前の刷では字が彫られていなかったところに字が彫られ、情報を付加したもの

例) 「宝英 ■ ■」 → 「宝英 伊予野間郡高橋村 渡辺宝治」

- (c) 前の刷までの表記に情報を付け足したもの

例) 「一夢 同井上 加藤吉兵衛」 → 「一夢 同井上晏起亭 加藤吉兵衛」

- (d) 前の刷までの情報を訂正し、表記しなおしたもの(書かれている内容が同じでも、彫りなおされているものについては、ここに該当させた。)

例) 「等栽 東京浅草旅籠町 佳峯園」 → 「等栽 東京日本橋通二丁目 佳峯園」

- (e) 前の刷に書かれた場所から、配置を変えたものの

例) 「き之部」欄の「鎧石 越中砺波郡青嶋 斉藤祐助」が、「か之部」に移動

- (f) 前の刷にあった情報を削除したもの

例) 「尚古 下総香取郡大根村 高橋五郎兵衛」 → 空欄

前の刷で変更された部分に関しては、どの段階の刷でも継続しており、それによって初刷から第四刷までを判断することが出来た。つまり、第二刷で改訂されたものに関しては、第三刷、第四刷においても改訂されたままであり、第三刷で改訂されたところは、第四刷でも継続していて、その段階を知ることが出来る。

以上の増補状況からわかるように、第二刷から第三刷にかけて大幅な訂正が行われている。その内容で主だったものは、氏名における漢字の間違いを訂正したものと、住所を訂正したもの、もしくは、より詳しくしたものである。特に住所の訂正は、信州高井郡と伊予野間郡のものが多く、訂正にあたって組織的な働きかけがあったと考えられる。

「古今俳諧明治五百題人名録」のほか、下巻裏見返しに付されている広告にも各刷による差異が見られた。初刷、第二刷にみられる「季寄掌中手洋燈 全壺冊／近刊」という表記が、第三刷では「季寄掌中手洋燈 対梅 宇乙彦編輯／佳峯園等栽／声画庵旭斎校 全壺冊／近刊」となり、編集者などの情報が付加されていた。また、初刷から第三刷までの広告には、「季寄掌中手洋燈」「掌中俳諧袂落」「増補俳諧糸衣」「俳諧麓の杖」「俳諧袖定」



規「開化柳多留」の六つの書名が挙げられていたのに対し、第四刷では「明治五百題」「同新」「同新々」「俳諧七百題」「発句八百題」「増補四季部類」の書の広告に差し替えられている。

以上のように、刊記部分は刷が異なっても同じままであるが、『古今俳諧明治五百題』は四刷あることがわかった。残念ながらそれぞれの刷の発行年次及び部数は不明であるが、少なくとも三度刷りなおしが行われており、当時、多くの需要があったことが伺える。

## 6. 書名

なぜ書名を「古今俳諧明治五百題」としたかについては、同書の「凡例」が注目される。「凡例」は7つの一つ書きからなり、その第1条に以下のようにある。(引用にあたり、私に句読点を補った。以下この項における引用は、すべて同様である。)

世に類題の集、数々有といへとも、名家の吟趣く、今人初学の吟のみ編るもの多し。今此明治五百題は、元禄の名家を始、中古近世の数百家の名吟也を目的とし、現在の諸家数千章を輯め、春湖幹雄の両宗匠に精研を乞、瑕なき金玉の詠を併せ編集し、古今の風調、時々の変革一瞬に見安うして、正風好雅の人々机辺を放さず、句案の一助とす。

元禄から現在(明治)までの俳諧を収録したことから、「古今俳諧」と付けられたことが知られる。

また、「凡例」の第5条に以下のようにある。

名義は千題集と披露すといへとも、初学の風子呼安きを要とし、明治五百題と改号す。

「千題集」として俳句を募ったが、(刊行するにいたっては)初学のものが呼びやすいように、書名を明治五百題とした、というのである。つまり、「千題」や「五百題」は正確な実数ではない。書名は、初学の者に受け入れられやすいか否かが問題とされたのである。

では、実際に挙げられた題数はいくつだろうか。「凡例」の第6条には、

配題千九十八題、句数五千八百章、卷末に開化、詠史、名所、山川、勝景、哀情、慶賀の吟を挙、文明開化の風流盛大を仰く。

とあり、題数は1098とある。しかし、実際に本文における題数を数えてみると、1269題であった。題数と句数については、次の「構成」の項で詳しく取り上げる。

## 7. 構成

『古今俳諧明治五百題』の本文は、「歳旦之部」、「春之部」、「夏之部」、「秋之部」、「冬之部」、「開化之部」、「詠史之部」、「名所神祇哀慶旅中之部」から成る。「歳旦之部」から「夏之部」までが上巻に、「秋之部」から「名所神祇哀慶旅中之部」までが下巻に納められている。本書は明治12年の刊行であり、明治の改暦の比較的すぐ後ではあるが、太陽暦に則って四季が捉えられている。すなわち、二月から四月が春、五月から七月が夏、八月から十月が秋、十一月から一月が冬である。ただし、一月は「歳旦」として別の部に分類され、本文の最初に配置されている。

「歳旦之部」で取り上げられているのは、正月の行事や事物、動植物の題である。題数は124題、句数は427句。「歳旦」のなかで最も多く詠まれている題は、「初鳥」と「初日」で、14句である。以降は、「福寿草」と「養父入」の13句、「鳳巾」の12句、「蓬莱」の10句と続く。

「春之部」には、二月から四月までの行事や事物、動植物の題が挙げられている。題数は266題、句数は1364句。「春」のなかで最も多く詠まれている題は、「梅」で52句である。以降は、「鶯」の40句、「柳」の36句、「花」の34句と続く。

「夏之部」には、五月から七月までの行事や事物、動植物の題が挙げられている。題数は313題、句数は1509句。「夏」のなかで最も多く詠まれている題は、「時鳥」で41句である。以降は、「牡丹」の35句、「暑」の31句、「清水」と「涼」の29句と続く。

「秋之部」には、八月から十月までの行事や事物、動植物の題が挙げられている。題数は281題、句数は1265句。「秋」のなかで最も多く詠まれている題は、「菊」で32句である。以降は、「名月」の31句、「虫」と「鹿」の27句、「稻妻」の24句と続く。

「冬之部」には、十一月と十二月の行事や事物、動植物の題が挙げられている。題数は214題、句数は1169句。「冬」のなかで最も多く詠まれている題は、「雪」で46句である。以降は、「千鳥」の36句、「時雨」の35句、「小春」の29句と続く。

「春之部」、「夏之部」、「秋之部」では、部の末に「春(夏、秋)朗詠遅来混題」として遅来の句、つまり締め切り後に到着して、後から挿入された句がまとめて挙げ

られており、それらはそれぞれの部の句数に含まれている。しかし、「冬之部」の末には「遅来追加四季混題」として、春夏秋冬の句がそれぞれ挙げられていた。そのため、これらは前述の句数には含めず、別に集計した。「遅来追加四季混題」に見られる「春」の句は 59 句、「夏」の句は 40 句、「秋」は 26 句、「冬」は 36 句であり、「遅来追加四季混題」の句数は全部で 161 句であった。

「開化之部」では、明治の時代になり新しく流布するようになった言葉が、題として挙げられている。たとえば、「皇政一新」、「愛国」、「権利義務」、「万国交際」、「富国強兵」といった明治新政府の政策に関わるものや、「瓦斯燈」、「博覧会」、「鉄道」といった新しい文化事象である。題数は 21 題、句数は 23 句で、ほとんどの題が 1 句ずつ詠まれている。

「詠史之部」では、歴史上の人物が題として挙げられている。たとえば、「楠公」、「源義経」、「武蔵坊」、「斎藤実盛」などである。題数は 18 題、句数は 24 句で、1 つの題につき 1 句から 3 句詠まれている。

「名所神祇哀慶旅中之部」では、名所や山川、勝景のほか、哀情や慶賀などが題として挙げられている。たとえば、「伊勢」、「日光男体山」、「高輪眺望」、「悼三上庵」などである。題数は 32 題、句数は 34 句で、「開化之部」、「詠史之部」と同じように、ほとんどの題が 1 句ずつ詠まれている。

以上の句をすべて合わせると、『古今俳諧明治五百題』に納められているのは、全題数 1269 題、全句数 5976 句となる。

さて、ここで問題となるのが、先に述べたように「凡例」には「配題千九十八題、句数五千八百章」、つまり題数 1098、句数 5800 とあり、実数とは異なることである。「開化之部」、「詠史之部」、「名所神祇哀慶旅中之部」をのぞいた歳旦春夏秋冬の句をみても、題数 1198 題、句数 5895 句であり、多少の差違が生じる。これはおそらく、題数に関してはちょうど差が 100 であるため、「凡例」における記入間違いの可能性が考えられよう。また、句数に関しては、「凡例」にあるのは募句をした際の締め切りまでの実数で、遅来の句が含まれていないからであろう。全句数から遅来の句数を引くと、5815 句となる。それを「凡例」ではきりの良い「5800」としたと考えられる。

## 8. 「人名録」

『古今俳諧明治五百題』に後付として付されている「古今俳諧明治五百題人名録」（以下「人名録」）は、同

書に納められている俳句の作者の俳号、住居、氏名（もしくは名字、結社名など）を、俳号のいろは順に並べたものである。

人名録に挙げられている俳人は、全 818 人であった。彼らの住居を地域別に見てみると、最も多かったのは下総の 273 人である。以下、人数の多かった順に、信濃の 158 人、常陸の 60 人、羽前 46 人、東京 41 人、上野 40 人、越中 38 人、伊勢 23 人と続く。

下総が 273 人と圧倒的に多かったことは、編集者の東旭斎が下総香取郡の出身であり、その地で活動していることが大きく関連しているだろう。実際に俳句を募ったのは旭斎であり、彼の出身地の俳人が多くなることは想像に難くない。旭斎が率いたという「朝日社」に関しては資料が乏しく、その実態は不明だが、「朝日社」の俳人が、多く名を挙げているものと考えられる。

前述した地域名を見てみると、中部や北関東周辺の人数が多くなっている。しかし、人名録全体では、その住居は全国に及んでおり、その募句が全国的に行われた事がわかる。また、人名録に載っている俳人は、当時の俳諧宗匠も挙がっているが、それ以外の人々の名前も見受けられる。

## 9. 「発行書林」

『古今俳諧明治五百題』の巻末、人名録の次頁より、「東京并ニ各地発行書林」として、同書を取り扱った書店名が挙げられている。

掲載されている発行書林は全 250 店舗で、全国各地に及んでいる。そのうち最も多いのは東京で、34 店舗である。下総の 19 店、信濃の 15 店、越後の 15 店が以下に続く。東京は、全国的に見て書店数が最も多いからと考えられるが、書店数が第二位、三位ではない下総、信濃の書店で取り扱いが多いのは、人名録においても下総、信濃が多かったことと関連するだろう。そのほか、「東京并ニ各地発行書林」にある書店の数順に地域を示すと、

- ・ 10 店舗：上総、常陸、羽前
- ・ 9 店舗：遠江、武蔵
- ・ 7 店舗：尾張、伊勢、駿河、上野、下野
- ・ 6 店舗：大坂、岩代、陸前
- ・ 5 店舗：美濃、相模、越中
- ・ 4 店舗：陸奥
- ・ 3 店舗：西京、三河、伊豆、安房、加賀、筑前
- ・ 2 店舗：甲斐、飛騨、磐城、越中、渡島、後志、周防、豊前、肥前、肥後

- ・ 1 店舗：陸中，羽後，越前，出雲，播磨，備前，  
長門，豊後，薩摩

となり、かなり広範囲の書店で取り扱われたことが知られる。

## 10. まとめ

『古今俳諧明治五百題』は「旧派」の宗匠が編んだ類題句集である。そのためか活版ではなく木版刷りの和装本で、一部に改訂・増補がなされても刊記についてはもとのまま使用され、明治12年刊とされてきた。しかし諸本を調査した結果、第四刷までであることが明らかとなった。それぞれの刷がいつ刷られたものかは不明であるが、少なくとも第四刷まで刷られたという事実は、『古今俳諧明治五百題』がそれだけ需要のあるものであったことを示している。だからこそ「続編」「続々編」が刊行されたともいえよう。

また、その本文の構成は、明治の改暦からさほど時間が経っていないながら、太陽暦に則ってなされている。さらに、文明開化によってもたらされた新しい事象を題として取り上げており、積極的に新しい時代に即応しようとしていることが見て取れる。これは、明治初期の俳人たちがいかに改暦や新時代に適応していったのかを知る手がかりとなるだろう。

また、その人名録は、他の俳書では俳号のみで本名が知れない人の本名と住所を知ることができる、貴重な情報源である。しかも初刷から第四刷にいたるまでに増補改訂がなされており、より正確な情報となっている。本稿で詳しくは触れていないが、この人名録に挙げられた住居を分析することで、当時の俳諧文化の地域的な広がり的一端を知ることができるだろう。

さらに、同じく巻末に付された発行書林一覧によって『古今俳諧明治五百題』が扱われていた書店を知ることができる。それにより、同書が全国的な書店で取り扱われていたことがわかった。

同時代の旧派の類題句集は続編等が編まれることが少なく、また人名録を付すこともまれであり、さらに、取り扱われた本屋が明らかであることも少ない。そのような中で、前述したような特徴を持つ『古今俳諧明治五百題』は、明治時代初期の重要な資料である可能性が高い

ものと言えよう。

なお、先にも述べたように『古今俳諧明治五百題』には、「続編」「続々編」がある。鳴弦文庫所蔵本をみる限りでは、書誌的には正編と続編、および続々編は同じ小本で、同程度の丁数、構成もほぼ同様で、収録俳人は重複するものもあるが、収録句は重複しない。しかし、正編も諸本に異同がみられたように、続編、続々編も諸本調査がなされる必要があるだろう。その上で、続編、続々編との比較検討、同時期の類題集との比較検討が今後の課題としてあげられる。

## 注

- (1) 勝峯晋風『明治俳諧史話』は、『近代作家研究叢書 45 明治俳諧史話』(昭和59年、吉田精一監修、日本図書センター)として再録されているものを参照した。
- (2) 越後敬子氏の論文としては、「明治期旧派類題句集概観」(『幕末・明治期の国文学 明治開化期と文学』平成10年、国文学研究資料館)、「明治の類題句集 ―旧派と新派を比較して―」(国文学研究資料館紀要、第24号、平成10年)、「明治初期類題句集」(国文学、平成13年7月号)がある。
- (3) 関根林吉氏「三森幹雄評伝(一)～(八)」(俳句、昭和53年4月号から11月号に連載)
- (4) 三森幹雄と正岡子規を比較した研究は、遠藤智子「三森幹雄の俳論 ―「画句図句之論」を巡って―」(俳句文学館紀要、第14号、平成18年)、青木亮人「明治俳諧の「余情」と「只事」 ―三森幹雄と正岡子規の応酬から―」(日本近代文学、第75集、平成18年)、青木亮人「三森幹雄と正岡子規の「眼」 ―明治俳諧における「写生」の位相―」(日本近代文学、第78集、平成20年)などが挙げられる。

## 【謝辞】

本稿をなすにあたり、貴重な御所蔵本を閲覧、調査させていただきました各機関に、厚く御礼申し上げます。

(平成21年4月30日受付)

(平成21年7月28日採録)